〈研究ノート〉

フィリピンにおける英語使用の現状

――英語の国際化の流れを踏まえて――

本多　吉彦*　　鈴木　邦成**

The Current Use of English in the Philippines: In the Context of the Internationalization of the English Language

Yoshihiko Honda　and　Kuninori Suzuki

要　　旨　本稿ではフィリピンにおける英語の使用状況を学術的視点から研究ノートとして分析，報告することによって外国語としての英語を学習する最善の方策を探っていく。フィリピンにおける英語教育の歴史などを踏まえて，今後の日本人の英語学習者にとっての最適な英語学習法を詳細に考察していく有力な資料とする。

キーワード　ピジン　　クレオール　　英語の国際化

1．はじめに

フィリピンにおいて使用されている英語は，米国などで使用されている英語とは，発音，文法，語彙など，さまざまな点で異なっている。

すなわちフィリピンで使用されている英語（以下，フィリピン英語と表記）とはピジン英語の一種とも解釈できるが，それはたんなるブロークン英語ではなく，相当に高度な使用者によって社会で広く活用されているということも忘れてはならない。

英語やフランス語は世界各国で話されている。例えば，「標準的なイギリス英語」，「標準的なアメリカ英語」，あるいは「標準的なオーストラリア英語」などが存在するが，その多少周辺的な言語として，ピジン，クレオールと呼ばれる言語形態が存在する。

ピジンやクレオールの歴史は古いが，十分に発展した「標準的な言語」と比べると，そうした周辺的な言語についてはまだよく分かっていない。ハイムズは，ピジンやクレオールは冠詞，連辞，活用といった言語的特徴が欠如していることが多いために，「正しい言語」とは見なされず，研究の対象としてはふさわしくないという間違った認識が示されていたことが研究の遅れの主要因と指摘している[1)]。

だが周辺言語の研究を充実させることにより，「言語とは何であるか」という命題に対して，

* 本学准教授　英語・英語教育　　** 本学非常勤講師　文化ファッション大学院大学准教授　英語・英語教育

社会言語学的視点からの解答を導き出し，同時に周辺言語の特徴を分析することによって，そうした周辺言語と類似点，共通点が多いと考えられるノン・ネイティブスピーカーが習得する「外国語としての標準的な言語」に対する効果的な学習法を考察していく土台を作り上げていくことを視野に入れ学術的な観点から研究ノートとしてまとめることとする。

2．フィリピンの英語事情

終戦記念日の2008年 8 月15日（金），10時30分から11時29分，日本放送協会は特別番組NHKスペシャル「果てしなき消耗戦　証言記録　レイテ決戦」を放送した。64年前の日米決戦に巻き込まれた現地レイテ住民の悲劇を現地レイテの80歳を越える年齢の生存者の証言が流暢な英語で放送された。80歳超の彼らの英語は，当時，アメリカによる教育がもたらした成果とも言えるのではないだろうか。

今日，英語が世界共通語としての位置を確立しているが，その主な理由として

（1）19世紀末まで世界に絶大な影響力を誇ったイギリスの植民地政策

（2）20世紀以降のアメリカの政治，経済におけるプレゼンスの影響

以上の 2 点が挙げられる。

Braj Kachruは世界の話者を 3 つの円（ネイティブスピーカーを内心円，植民地下にあって土着化した英語を話す国々を外心円，英語が外国語である国々を拡大円）で表した。このThe three 'circles' of Englishによると現在，アメリカ，イギリス，アイルランド，カナダ，オーストラリアやニュージーランドといった国々のいわゆる英語のネイティブスピーカーの人口は3.2億人から3.8億人と考えられる。続いてインド，シンガポール，フィリピンと言った英語以外の母語を持ち，歴史的に英米の植民地下で英語が多言語社会で第二言語として重要な役割を果たした国の英語話者の人口は 3 億人から 5 億人と考えられる。さらに中国，日本，ギリシャ，ポーランドといった英語を国際語とし重要であると位置付け，これらの歴史的に欧米の植民地下になかった国々の英語話者の人口は 5 億人から10億人存在すると見積られている[2)]。

こうした英語話者の中で本稿は英語を母語とはせず，しかし公用語として重要な役割を果たしているフィリピンの英語に焦点を当てて日本における英語教育の将来への指針とすることを考察していくとする。

日本に滞在するフィリピン人の英語力にはしばしば目を見張るものがある。フィリピンの英語話者数は世界第三位でアジアでは第一位である[3)]。

他方，教育の機会均等が概ね保障されている日本においては望む，望まないに関わらず 3 年ないし 6 年の英語学習の機会を誰もが持ちながらも，多くの日本人が「使える」というレベルに達していない。この日本の英語教育を改善する上でフィリピンの英語教育の歴史ならびに現状を考察することは今後の日本の英語教育の発展に大いに参考になるだろう。

3．フィリピンの概要

フィリピン共和国の現地語による国語表記はRepublika ng Philipinasとなる。英語表記は

Republic of the Philippinesとなる。

この国名である「フィリピン」は1543年にサマール・レイテ地方にビリャロボス遠征隊が到着し，その当時のスペイン王子であったフェリペにちなんだものであり，「イスラス（島）・フェリピナ」に由来し後に「フェリピナス」と総称された[4)]。

フィリピンは約7100の島からなり総面積は約30万平方キロで日本の４分の３強の国土を持つ国である。そこに住む人々の総人口は6800万人（1996年現在）で，そこにはマレー系（85％）のビサヤ族，タガログ族，イロカノ族，中国系，政治や経済で力を持っているメスティーソ（スペイン系混血）さらに南部のイスラム教徒であるモロ族が住み，それぞれの民族が固有のことばを持つ[5)]。

これらのことばにはタガログ語（29.7％），セブアノ語（24.2％），イロカノ語（10.3％），ヒリガイノン語（9.2％），ビコル語（5.6％），ワライ語（４％），パンパンゴ語（2.8％）があり，フィリピンの八大言語と呼ばれている[6)]。

上記にあげた語はそれぞれが異なった言語に相当するために独立後，国民全体のコミュニケーションを可能にするフィリピノ語（ピリピノ語）が国語として定められた。このフィリピノ語はタガログ語を基礎とした国語である。しかし英語がフィリピノ語同様に使われる頻度は高い。その理由の１つとして孤島や少数民族の言語を合わせると100以上にもなるという多言語社会というフィリピンの姿にある。英語は異文化，異民族間でのコミュニケーションの手段となっている[7)]。

したがってフィリピンにおいては二言語併用という言語形態が存在し，公的な環境においては英語を，そして私的な立場ではフィリピノ語が用いられることを指摘している学者もいる[8)]。

フィリピンで教育言語は英語とフィリピノ語の二言語を用いた教育が成されている。英語は，国際コミュニケーションの手段として小学校３年でも一週間に５時間の授業が組まれている。

また，フィリピノ語は国民がフィリピン人としての威厳を保つための国語として位置付けられている[9)]。

ところでフィリピンの英語教育を理解するためには，この国の歴史を振り返る必要がある。フィリピンは400年にも及ぶスペイン統治下から米西戦争後，1898年のパリ講和条約によって米国に割譲された。その後，日本軍に占領され第二次世界大戦後の1946年に独立を果たしたが今日まで政治的に不安定な国である。なかでもイスラム教徒とキリスト教徒との争いは絶えない。

スペインはキリスト教を布教することによってフィリピンを支配したが，後にこの地にやって来たアメリカは教育を通じてフィリピンの人々を治めようと試みフィリピン各地に学校をつくりアメリカ人教師を派遣し，これがフィリピンにおける英語の公用語化のはじまりである。

フィリピンにおける英語教育は1901年に540人の米教師が来比したことに始まる。フィリピン英語は発音，文法が修正されながら土地のニーズに合うように順応されている点が特徴である。当時の植民地支配国による地元住民への教育は主にエリート層に限定されていたが，これとは対照的にアメリカは住民全員に教育を与えようとした[10)]。

なお，フィリピン英語の発音の特徴を述べる上でフィリピナ語の母語干渉を無視することはで

きない。フィリピナ語のベースとなっているタガログ語は16世紀半ばまでは独自の文字を持っていたがローマ字の普及とともに現在では消滅している[11]。そのため英語からの借用語は比較的，標準英語に基づいて発音される。

フィリピノ語のアルファベットはアバカダと呼ばれアルファベット28文字で表記される[12]。このフィリピナ語の音声形態がフィリピン英語に母語干渉として影響を及ぼしていると考えられる。例えばフィリピン英語においては英語の[f]は[p]の発音になる。フィリピン語の子音は，[p] [b] [t] [d] [k] [g] [h] [l] [m] [n] [ng] [r] [s] [w] [y] と声門閉鎖音の['']の計16であり，この中に[f]は含まれていないからである[13]。母音は５つしかなくローマ字読みをしたり，rやthの発音も英米のものとは異なる[14]。rの発音においてはアメリカ英語の舌先を上に反らして高口蓋と軟口蓋の境に付けるか接近させて発音する方法は用いられず歯茎音となり，英語の[r]よりも強い巻き舌で発音される。またlは[l]に似ているが舌を上の前歯の後に直接付け，かつ舌の形もほぼ平坦にして発音されるという特徴を持つ[15]。

４．フィリピンの英語教育制度

フィリピンでは英語はメディア媒体や文学において受け入れられている。1946年，タガログ語がスペイン語と英語とともに公用語となった。ナショナリズムの高揚とともに英語の役割は軽減され1974年には二言語教育政策が履行された。

フィリピンでは小学校１，２年次はそれぞれの地域のことばで授業が成されると同時に国語であるタガログ語などを学び始め，３年生からは母語と英語が導入される。高校では，社会や国語といった社会系の科目は母語で，算数や理科といった理数系の科目は英語で授業が行われるのが一般的である[16]。

1946年の独立後，マニラ都市部の言語であるタガログ語がフィリピン国家の権威を保つために公用語とされた。このタガログ語を話す人口はフィリピンの民族の中でも最大規模をほこり彼らの大多数は農民である。1960年代にはタガログ語と英語の合成語としてタガリッシュTagalish（Tagalog＋English）という語が生まれた。Tagalishまたの名をEngalogは国内映画やラジオやテレビなど広範囲に使用されている。

５．フィリピンの英語の基本的特徴

５．１　フィリピンにおける二言語併用の例

フィリピン人は彼らの英語の正当性に自信を持っていて，その変種の独自性について信念を持っているという研究もある。フィリピン人の話す英語が，日常の話し言葉に限らず，書き言葉においても，英語とタガログ語の混合が生じ，それらはフィリピン文化特有の事物や心情を表す名詞や形容詞に留まらず，助詞，副詞，接続詞にまで及ぶという点も指摘されている。ちなみにその例としては２文を繋ぐbutの代わりにperoが使われることや，副詞thenの代わりにtaposが用いられることが挙げられる[17]。

実際，フィリピン英語はその独自性を保ちつつ，英米のネイティブスピーカーが困難なく理解

できる表現を有している。フィリピンの二言語併用の例を以下のように見ることもできる[18]。

図表１　フィリピン英語と標準英語の比較事例表

フィリピン英語	標準英語	日本語訳	解説
Arrange to pay in regular amounts May tatlong paraan para maisaayos ang paghulog ng pera sa inyong Cash Card account: a. Meg-deposito ng pera sa ibang Hongkongbank account, at any Hongkongbank ATM, using your Cash Card…	'…. You can arrange to pay money into your…in three ways: a By depositing cash or cheques, or transferring money from another…'	「現金か小切手で預金するか、または他行から振込みをするかの３通りの方法のいずれかであなたの香港銀行のATM口座に入金するか決めることができます」	他動詞arrange「配列する・手配する」の目的語にpay in「（金・小切手などを）（銀行・口座に）預ける」という成句が用いられている。この例においては、標準英語から理解できるように主語と助動詞canが省略さている。日本語における英語からの借用語では、このような事例は見当たらない。
'Peks man,' she swears. 'Wala pang nangyayari sa amin ni Marlon. We want to surprise each other on our honeymoon.'	'Cross my heart,' she swears. 'Nothing yet has happened between Marlon and me….' We want to surprise each other on our honeymoon.	「彼女は神に誓って、まだ私とマーロンは何もなかったわと言う」「ハネムーンでふたりともどきどきしたいから」	日本語における会話では英語からの借用語としてのカタカナ語が用いられる程度であってセンテンス（文）が用いられることはない。しかしフィリピン英語においては二言語併用の中でセンテンスが用いられている点からすると高度なレベルの文を構成する英語力を有する話者であることが想像できる。
Donna reveals that since she turned producer in 1986, her dream was to produce a movie for children: 'Kaya, nang mabasa ko ang Tuklaw as Aliwon Komiks, sabi ko, this is it. And I had the festival in mind when finally I decided to produce it. Pambata talaga kasi ang Pasko,	'Donna says. ('That is why when I read the story 'Shake-Bite' in the Aliwon Comic Book, I told myself, this is it…. Because Christmas is really for children').	「1986年に映画監督になったということで、彼女の夢は子供向けの英語を製作するとドナは打ち明けた」「ドナは'Shake-Bite'の話を読んだ時に自分にこれだと言った。だってクリスマスはなんたって子供達のものだから」	日本の学習者において従位接続詞sinceとbecauseの使い分けでしばしば間違いを目にすることがある。どちらも日本語における定義が「～だから、なので」ということで、その違いが理解されていない場合が多い。becauseは、はっきりとした理由を新しい情報として提供するが、sinceは既に話し手・聞き手にわかっていることを述べる。こうした日本における文法的に高度と思える用法も標準英語として自然な英語が二言語併用時に用いられている。

Pwede kayong magbayad three months after arrival. Pwede pang i-extend up to two years ang payment. At sa Pinakamababang interest rate pa.'	'It is possible to pay three months after arrival. It is possible to extend payment up to two years. And the interest rate is the lowest.'	「到着してから3ヵ月後に支払うことは可能です。また最長2年まで支払の延期が可能です」「しかし、利率は最低の率となります」	スペイン植民地下の影響からスペイン語*pwede*「それは不可能」が借用語として用いられている。ここでの二言語併用ではセンテンスが用いられているのではなくthree months after arrivalという副詞句がフィリピン語に挿入されている。日本語における英語からの借用語として句が用いられることは稀である点からもフィリピン英語のレベルの高さを認識することができる。

（出典）Tom McArthur, *Oxford Guide to World English* (New York, Oxford University Press, 2003) 345を基に作成

上記の英文はどれも文法的な規則が充足されており，ネイティブスピーカーが用いる標準的な「正しい英語」と判断することができる。

二言語併用の習慣は，フィリピンの社会的な特異性によるものが大で，その1つとして85のマレーポリネシア語がフィリピンには存在する。それらの多くは互いに理解不可能である。そしてそれらの地域にとって英語は基盤として使われているのである。こうした事情が二言語併用を定着させたと考えられる。

5．2　文法・語法などの特徴

フィリピンの英語では三人称単数現在における動詞のs/esがない。単純過去の代わりに現在完了を，現在完了の代わりに過去完了が用いられる。また標準英語では現在形で表現される習慣が現在進行形が用いられる。さらに過去形の複文において従属名詞節が現在・現在完了形となり複文における時制の一致がなされていない。このフィリピン英語の時制の特徴はフィリピノ語からの影響によるものと考えられる。フィリピノ語の動詞には単純に過去や未来を表す時制はなく代わりに相が存在する。『フィリピノ語　文法入門』によるとフィリピノ語は英語のような時制でなく動作や状態が未開始であるか，または予期される未然相，行為が既に開始されているが，まだ完了していない未完了相，行為が既に開始され，完了している完了相，さらに不定詞や命令として用いる不定相があり，時制の概念は時を表す副詞などを用いて表す。このことがフィリピン英語の時制の特徴に表れている。その他には冠詞の用法が標準英語とは異なることや他動詞を自動詞として用いられる点が挙げられる[19]。

スペイン語からの借用語が多い。さらにフィリピノ語/タガログ語からの借用語がありフィリピノ語からの直訳的な用法がある。ただし，フィリピン英語の使用者はハワイ英語などにおける第一世代の移民などとは異なり，数世代を経ているために流暢性については極めて高いレベルであり，また言い回しや新語，造語の造成メカニズムについても高度に洗練されていると思われる。表2，表3はその一部例であるが，いずれも英語のネイティブスピーカーならばフィリピン在住者ではなくても意味の理解に多大な困難性を要しないと思われる。

図表２：借用表現の例

Turn on the light/radio.	Open the light/radio.
For a long time	Since before yet
He keeps playing.	He is playing and playing.

（出典）Tom McArthur, *Oxford Guide to World English* (New York, Oxford University Press, 2003) 347を基に作成

図表３：フィリピンで使われている新語・造語の例

aggrupation	スペイン語のagrupación（a group）から
captain-ball	英語のa team captain in basketballから
cope up	英語のto keep upとcope withからの合成
carnap	英語のto stealまたはkidnap a carから
Jeepney	ジープを改造してつくられたバス
hold-upper	英語のhold upからで武装して金品を強奪する人を意味する

（出典）Tom McArthur, *Oxford Guide to World English* (New York, Oxford University Press, 2003) 347を基に作成

６．日本人の英語学習への教訓

フィリピンの英語教育は数世代を経て，その継続性の中に流暢性を獲得し，国際的にも認知されている。それをふまえて考えると，日本の英語教育が目指すべき姿も見えてくるかもしれない。

例えば1990年代中葉からのIT（情報技術）革命以来，ITのみならず弁護士，医師，会計士，数学者，経済学者，コンピュータプログラマー，国際公務員などの分野でインド人が英語力を武器に世界中で活躍している姿は，今日のインドの急速な発展とともにテレビや新聞を賑わしている[20]。

日本がモデルとする国々は英語を母語としている国の英語教育ではなく英語を実際に第二言語として使用している国の英語教育である。

インターネットの到来とともに多国籍企業はバックオフィス機能をフィリピン，インド，マレーシア，シンガポールなどの英語圏に依存し始めている。

これらの国々は他のアジアの国よりも英語の普及率が高く，例えばネット関連の企業のテクニカルサポートを対象として雇用が生まれている。AOL（アメリカ・オンライン）は1998年にフィリピンの閉鎖されたクラーク米空軍基地跡地の経済特区に１日24時間態勢で毎日１万から１万２千の料金や技術に関する問い合わせに現地採用のスタッフで対応している[21]。

フィリピンにおいての英語教育に関しては一定の成果を上げていると考える研究者は多い。その理由としてフィリピンの人々は日本とは桁外れと言える英語に接する機会を挙げている。テレビ，ラジオや映画などを通じて学校に行けない子供ですら片言の英語を耳で覚えていくのである[22]。

これに対してさまざまな英語への翻訳が行われている日本においては，英語を実生活に役立たせる機会を自ら摘んでしまっているという指摘もある[23]。

英語の経済的な価値が高まった現在，フィリピンではさらに英語の需要が高まっていると考え

る声もある。フィリピンでは教養のある人で英語を母語とする人々の増加に伴い「標準フィリピン英語」という概念が教育界で注目を集めている[24)]。

Barbara SeidlehofferやJeniffer Jenkinsらのように世界共通語としての英語のあり方を「英語を外国語として習っている国では，学習の初期，中期段階でNS Englishes（ネイティブスピーカの英語）をモデルにすることは必要だが，母国語の影響で，ニア・ネイティブになれないことを認識し，一生劣等感に悩まされる必要はない」と紹介する研究者もいる[25)]。

7．まとめ

英語の国際化の現状と課題という視点でフィリピン英語に焦点をあてて考察，分析してきた。

現在，英語は世界共通語としての地位を確立し，12億人から15億人もの人々が日常，使用している。英語のネイティブとノン・ネイティブの比率は１対３と考えられている。ノン・ネイティブの括りの中で多言語社会フィリピンは歴史的に英語が第二言語として重要な役割を果たしている国として知られている。このフィリピンの英語はアメリカ植民地政策の中で生まれた産物と言えよう。その背景にはアメリカの植民地政策にあり，彼らは英語を通じてフィリピンを統治しようと試みた。

フィリピンは独立後，タガログ語をフィリピンの公用語とし，ナショナリズムの高揚とともに英語の役割は軽減されていった。フィリピン英語はタガログ語との二言語併用やフィリピン独自の文法や語法を持つことによって発展していったが，今後の行方は定かではない。

しかしフィリピン英語は一定の成果を上げていると考えられている。これに対して日本人の英語をひと括りに表す語はこれまでに存在しない。これは日本の英語教育がネイティブ崇拝に固執した結果である可能性が高い。フィリピン英語の持つ適合性は日本の英語教育の課題を検証する上での今後の重要な研究対象となる可能性は高い。

主要参考文献

邦語文献

大上正直監修『きみにもできる国際交流　12　フィリピン』偕成社，東京，2000年
大上正直『フィリピノ語　文法入門』，白水社，東京，2006年
河添恵子『アジア英語教育最前線』，三修社，東京，2005年
河俊昭他『アジア・オセアニアの英語』，めこん，東京，2006年
佐川年秀『すこし話せると10倍楽しい　フィリピノ語』，明日香出版社，東京，2007年
澤田公伸『ことたびフィリピノ語』，白水社，東京，2003年
鈴木静夫『物語フィリピンの歴史「盗まれた楽園」と抵抗の500年』，中央公論新社，東京，2008年
祖慶壽子『アジアの視点で英語を考える』，朝日出版社，東京，2005年
デイビッド・Ｊ・スタインバーグ著，堀芳江他訳『フィリピンの歴史・文化・社会―単一にして多様な国家』，明石書店，東京，2000年
船橋洋一『あえて英語公用語論』，文藝春秋，東京，2000年
本名信行『事典　アジアの最新英語事情』，大修館書店，東京，2002年
本名信行『アジア英語辞典』，三省堂，東京，2002年

矢野安剛，早稲田大学国際言語文化研究所『世界のことば文化シリーズ　英語世界のことばと文化』，成文堂，2008年

英語文献

Crystal, *David English as a Global Language second edition* Cambridge University Press New York, 2007
Hymes D. H., *Pidginization and Creolization of Languages* Cambridge: Cambridge UP, 1971
McArthur, Tom *Oxford Guide to World English* New York, Oxford University Press, 2003
Lippi-Green, Rosina *English with an Accent* Routledge New York, 2006

注

1）Hymes D. H., *Pidginization and Creolization of Languages* (Cambridge: Cambridge UK, 1971) 3.
2）Crystal, David *English as a Global Language second edition* (New York, Cambridge University Press, 2007) 60-61.
3）本名信行『事典　アジアの最新英語事情』（大修館書店，東京，2002年），199頁。
4）鈴木静夫『物語フィリピンの歴史「盗まれた楽園」と抵抗の500年』（中央公論新社，東京，2008年），298頁。
5）大上正直監修『きみにもできる国際交流　12　フィリピン』（偕成社，東京，2000年），41頁。
6）鈴木静夫『物語フィリピンの歴史「盗まれた楽園」と抵抗の500年』（中央公論新社，東京，2008年），「フィリピンの現況」より。
7）河原俊昭，川畑松晴『アジア・オセアニアの英語』（株式会社めこん，東京，2006年）12頁。
8）同上，13頁。
9）大上正直監修　『きみにもできる国際交流　12　フィリピン』（偕成社，東京，2000年）6-8頁。
10）河原俊昭，川畑松晴『アジア・オセアニアの英語』（株式会社めこん，東京，2006年），15頁。
11）佐川年秀『すこし話せると10倍楽しい　フィリピノ語』（明日香出版社，東京，2007年），21頁。
12）大上正直『フィリピノ語　文法入門』（白水社，東京，2006年），12頁。
13）同上，8頁。
14）大上正直監修『きみにもできる国際交流　12　フィリピン』（偕成社，東京，2000年），6頁。
15）澤田公伸『ことたびフィリピノ語』（白水社，東京，2003年）9頁
16）大上正直監修『きみにもできる国際交流　12　フィリピン』（偕成社，東京，2000年），11頁。
17）本名信行『世界の英語を歩く』（集英社，東京，2003年），74-76頁。
18）Tom McArthur, *Oxford Guide to World English* (New York, Oxford University Press, 2003)
19）大上正直『フィリピノ語　文法入門』（白水社，東京，2006年），96-97頁。
20）船橋洋一『あえて英語公用語論』（文藝春秋，東京，2000年）100頁。
21）同上，45頁。
22）河原俊昭，川畑松晴『アジア・オセアニアの英語』（株式会社めこん，東京，2006年），18頁。
23）猪口孝『英語は道具力』西村書店，東京，2008年，47, 103, 158-159頁。
24）河原俊昭，川畑松晴『アジア・オセアニアの英語』（株式会社めこん，東京，2006年）18-19頁。
25）矢野安剛，池田雅之『世界のことば文化シリーズ　英語世界のことばと文化』（早稲田大学国際言語文化研究所，成文堂，東京，2008年），287頁。